いなほ

第19号

1972

椚山小学校

ぼくの夢、わたしの夢

学校長　山田克久

ぼくは、将来「発明家になっていろいろな発明をして人々の生活をゆたかにしたい」、「飛行機のパイロットになれたらなあ」、「アメリカのプロ野球選手になりたい」、「大規模な農業をやりたい」、「船長さんになりたい」、……。

わたしは、大きくなったら「幼稚園の保母さんのような人の役にたつ人になりたい」、「生徒に親しまれる先生になりたい」、「スチワーデスになって世界中をまわりたい」……。

まもなく卒業の日を迎える六年生の卒業記念文集の中に、ぼくの夢、わたしの夢が一ぱいでています。この夢を一人一人が胸の中にしっかりしまっておいて、大きくふくらまして下さい。

今年もまた「いなほ」第十九号が誕生いたしました。この中には、ことし一年間みなさんの学校のこと、家のこと、友だちのこと、夏休みや冬休みの思い出、卓球大会、書初大会、水泳大会でがんばったことなどの、たくさんの生活の記録が、作文や日記、詩などに素直に書かれています。小学校を卒業するまでみなさんの手もとにのこるこの六冊の「いなほ」は、大切にしまっておいて下さい。そして、大きくなってまたこれを読みなおしたとき、子どもの頃のうれしかったこと、かなしかったこと、楽しかったこと、心にいだいた夢などが思い出されて、みなさんの大きなはげましになることでしょう。

今年は、雪の少い冬でした。たのしみにしていたスキーが出来ませんでしたが、もう田んぼの土堤のあちこちから、ふきのとうの若々しい芽が、黒土の中から出てきました。そしてポカポカと暖い春の日ざしにさそわれて、むくむくと大きくなっていきます。やがて、花が咲き、実を結びます。やわらかい、ふかふかした羽根をつけた竹とんぼのような小さい種が、春の風に乗せられて、ヘリコプターのように飛んでいきます。遠くへはこばれたその種が、土の中でまた新しいふきのとうの命を育てていきます。

私は、みなさんがこの種のように、高く高く、遠く遠くへ飛んで、ぼくの夢、わたしの夢を大きく育て上げ、たくましい、りっぱな人になるよう祈っています。

―目　次―

ぼくの夢 わたしの夢……学校長　山田克久

作　文

一年生……一～四

二年生……五～八

三年生……九～一二

四年生……一三～一六

五年生……一七～二〇

六年生……二一～四〇

表紙版画　六年　吉田智美

きゅうしょくの　おばさんへ

一年　かみしま　あけみ

きゅうしょくの　おばさんは、まい日、いっしょうけんめいに　あせ水たらして　がんばっているね。これからも、いっしょうけんめいつくってね。おばさんのおかずが、とってもおいしいのです。これからも、おいしいごちそうを、つくってね。わたしのすきなのは　うどんです。だから、つくってね。

一年　すぎた　ゆみこ

おばさんたち　まいにち　いそがしいでしょう。おばさんたちのつくった　きゅうしょくは、とても　おいしい。

わたしは、ぱんぱーぐや　くじらのにくや　ハムが　大すきです。おばさんたちの　つくった　おかずや　おつゆは　とっても　おいしいです。うちのごはんより　学校の　きゅうしょくのほうが　おいしいです。

これからは、のこさず　たべるように　します。おばさん、ぜんこうの　おぼんや、しょっきを　あらうのとってもひどいでしょう。これからも　がんばって　きゅうしょくを、つくってください。

一年　すぎた　ばれとし

きゅうしょくのおばさんは、なぜ　あんなおいしいものを　つくるんだろ――。

きゅうしょくのでっかい　おかまもあるし、おぼんも　いっぱい　あるから　いいですね。

きゅうしょくの　おばさんは、そんなに　いっぱい　おかずを　つくれるの　ですか。

なぜ　きゅうしょくの　おばさんは　きれいに　しょっきを　あらうのですか。きたないしょっきで　たべると　びょうきに　なるからですね。

おいしい　おかずを　つくって　くれて　ありがとう。

きゅうしょくの　おばさんは　おいしいものを　つくるのが　ひどいでしょう。

きゅうしょくの　おばさんは　いろいろ　つくれるのですね。

ぼくは、きゅうしょくを　のこさず　たべます。いつも　一とうしょうにたべます。

おばさん　これからも　おいしい　ごちそうを　つくって　ください。

一年　なかじま　しのぶ

このあいだ　おばさんたちの　おしごとを　先生と　いっしょに　みに　いきました。
きゅうしょくの　おばさんは、いっしょうけんめいに　ぼくたちが　たべる　おかずを　つくっていました。
きゅうしょくばには、でっかいハムが、ありました。すごく　いっぱい　おかずが　ありました。
ぼくは、はやく　たべたいなあと、おもいました。おかずの　ところを　みていると、きかいが　うごき　はじめました。
きゅうしょくの　おばさんたちは、ねっしんになって　きゅうしょくを　つくって　いました。
きゅうしょくの　おばさん　いつも　ありがとうございます。

一年　あおき　じゅんこ

きゅうしょくの　おばさんは、ひどいでしょう。ぜんこうの　みなさんの　たべものの　のこしたものは　どうするのですか。わたしも　わかりません。どうして　やりますか　きかせて　くださいね。
わたしの　すきなものは、いっぱい　ありますから　よくきいてね。

まめでしょう。うどんでしょう。にくでしょう。バナナでしょう。りんごでしょう。みかんでしょう。はんばーぐでしょう。コロッケでしょう。
わたしの　すきなものを　つくってね。

一年　あおき　ひろひと

ぼくは、きゅうしょくが　だいすきです。それでも　パンを　たまに　のこして　いくときも　あります。ぼくは、それで　うちで　パンを　たべます。おとうとにも、はんぶん　やります。
ぼくは、くじらのにくが　だいすきです。それでくじらのにくが　でたら　みんな　たべます。コロッケも　すきですから　たまに　つくって　ください。

一年　しんむら　ちづこ

まいにち　おかずを　つくってくれて　ありがとう。まいにちの　おかずは、おいしい　ですよ。
わたしの　すきなものは、はんばーぐです。コロッケも　だいすきよ。コロッケも　はんばーぐも　つくって　ください。
おばさんたち　ありがとう。

（給食のおばさんへ出したお手紙です）

ふゆやすみの　にっきより

一年　おおた　まさみ

十二月　二十六日　（日）　雨

きのう、わたしたちの　ぶらくで、クリスマスかいが　ありました。
はじめに　ゲームを　して　それから、かるたをしました。
ゲームを　しながら、えびせんを　たべたり、かるたを　しながら、じゅうすを　のんだり　しました。
ぶらくちょうが、あめを　なげ、わたしたちは　ひろいました。

十二月　二十七日　（月）　雨

きのう、わたしは、ワンマンバスにのって　と山へ　いって　きました。
うしろの　ほうに、じょうしゃけんの　とるところが　あって　まえのほうに　おりぐちが　ありました。そうして　しゃしょうさんが　いませんでした。それで、うんてんしゅさんの　よこに、お金とじょうしゃけんを　いれるところが　ありました。

十二月　二十八日　（火）　くもり

きのう、わたしは、きせかえを　しました。そのきせかえの　名まえは、おひめさま　きせかえでした。
どれすと　まんとが、ついて　いました。
きせかえが、しゃべらないので　わたしが　しゃべりました。なんと　しゃべったか　おしえて　あげましょう。
「もし、もし、はい、はい。」
と　いいました。まるで、でんわで　おはなしを　している　みたい　ですね。

一年　よしだ　まさみ

十二月　三十一日　（金）　はれ

きょう、わたしは、おばあちゃんに　たこを　かって　もらいました。
そして　ひもを　つけたら　しっぽを　つけて　たこあげを　しました。
かぜが　あったので　たかく　あがりました。
よる　みかんを　たべたり、おそばを　たべたりして、たのしく　あそびました。

一月　一日　（土）　くもり

きょう、あさ　はやく、みんなで　おもちを　たべました。とても　おいしかったです。
そして　しゅうじを　かきました。あんまり　じょうずでは　ありませんでした。それから　かるたをしたり　あそんだりしました。

一月　二日　（日）　くもり

きょう、わたしは、おとうさんと　おかあさんに　おとしだまを　もらいました。
おとうさんは、千円で　おかあさんは、五百円でした。ちょきんに　しようと　おもいます。
夕がた、おかあさんと、わたしと　きみじまへ　いきました。

一年　あおき　ひろこ

一月　五日　（水）　雨

きょう、わたしは、おんせんに　いきました。わたしは、おふろに　五かい　はいりました。まりちゃんは、四かい　はいりました。ゆみちゃんは　六かい　はいりました。
ながしかくの　おふろでした。おふろの中には、あわが　ふきでて　いました。せなかに　あてると　いいきもち　でした。かがみも　ありました。
おふろから　でてくると　ごちそうが　きていました。

一月　六日　（水）　雨

きょう、わたしは、おけさゆで　がムを　かいました。キャラメルもかって　へやに　かえって、おひるを　たべました。おひるを　たべてから　あそびに　いきました。すべりだいに　のって　あそびました。

一月　七日　（金）　はれ

きょう、あさ、おきてみると　水たまりに　ぜんぶ　こおりが　はって　いました。きんぎょが　はいっている　ばけつにも　こおりが　はって　いました。きんぎょが　さむいのか　じっとしているので　わたしは、こおりを　わって　川に　はなしてあげました。きんぎょが　ちょろちょろと　うごきました。
さむくなって　きたので、うちに　はいりました。こたつに　はいりました。あったかくなったころよるに　なって　いました。まっちゃんが　かえります。わたしは、まんがを　みて　いました。

のらくろ

二年　青木　まさ人

ぼくの　家に　まっ黒な　犬が　います。テレビにでる　のらくろに　よく　にているので　弟のよしとと　ぼくと　二人で「のらくろ」とつけました。
朝と夜の　ごはんは　ぼくが　やっています。たまに　さんぽにも　つれて　いきます。
このあいだの夜　おとうさんと　ぼくとのらくろとで　たばこを　買いに　いくとちゅう、のら犬がきゅうに　道のまん中に　とび出したので自どう車に　はねられました。自どう車にのっていた人もおりてきてのらくろを　みました。心で「ごめん」といって　いるように　みえました。おとうさんが　うんてんしゅさんに「ごめんなさい」といいました。
少したつと　自どう車は　いってしまいました。のらくろは　後ろの足を　ひきずって　きました。家の中で　のら犬は　いたそうに　小さい声で「くん　くん」とないていました。あんまりなくので　かいちゅうでんとうで　みてみると　頭の毛が　むしられて、口から　ちが　いっぱい　ながれて　いました。おとうさんは　赤チンキをつけてやりました。ぼくちの近くに　犬の　おいしゃさんが　あるといいんだがなあ　と思いました。おとうさんも　おかあさんも　ぼくと　同じことを　思っているように　見えました。それからのらくろは　家の中でねてばかりいました。ぼくはのらくろに　早く元気に　なってほしいと思いました。なおるのに　十日かかりました。
今では　元気で　ぼくと　あそんでいます。

おにいちゃん

二年　鍋谷　けんじ

ぼくは　おにいちゃんと　よくけんかを　します。おにいちゃんが　べん強をしているときに「にいちゃん　あそぼう」といいます。おにいちゃんが「なにお」といいます。そうすると　ぼくは「にんげん」といいます。そうしたらにいちゃんが「けんぼう　にんげんだったか」といいます。ぼくが「おにいちゃん　ぼくを　何だと思っていたんだ」といいます。おにいちゃんは「ブタと思っていた」と　いって、ぼくの　頭の毛を　つまんで　ぎゅうとひっぱります。ぼくも　まけないで　おにいちゃんの　毛を　ひっぱると　おにいちゃんは、ぼくの毛を　もっと　強く　ひっぱります。それから　けんかが　はじまります。にいちゃんは　毛を　はなして　ほっぺを　つめったり、耳を　ひっぱったり

します。ぼくも　まけないで　手で　足をひっぱります。そうすると　おじいちゃんがきて「こらっ。やめんだと　外へ　だすぞ。」と　いいます。ぼくと　にいちゃんは　すぐに　けんかを　やめます。

でも　ぼくは　おにいちゃんが　大すきです。ぼくが　はしか　になって　ねているとき　にゅうぜんへ　行って　プラモデルを　買ってきて　くれました。そして「けんちゃん　早く　なおれよ。」と　いって　くれました。

けんかをしても　ぼくは　おにいちゃんが　大すきです。

たっきゅう大会

二年　吉田　おさむ

おととい　二年生だけの　たっきゅう大会がありました。まず　はじめは　さとしくんと　せいじくんが　やりました。二人とも　しんけんに　いっしょうけん　やっています。さとしくんが　かちました。みんなは「ワア　ワア。」大さわぎです。

つぎに　つよしくんと　きよはるくんです。つよしくんが　はじめから強いので　きよはるくんは手も足もでません。とうとう　つよしくんが　かちました。

やっと　ぼくのばんが　きました。ぼくは　はりきって　います。

ぼくと　しん一くんの　しあいが　はじまりました。しん一くんを　みると　とても　しんけんな顔を　しています。ぼくは　心の中で「まけるもんか。」と思いました。いっしょうけんめい　やりました。

そして　さいごの　一点に　なりました。ぼくは　おもいっきり　ピンポン玉を　うちましたが　しん一くんが　うけました。もう一ど　強く　うちました。しん一くんが　うけそこない　ました。点が　はいりました。ぼくは　うれしく　なりました。

あとの　人たちの　しあいが　おわって　ごんどは　かったものと　かったものが　しました。

ぼくと　さとしくんと　やりました。また　ぼくが　かちました。

一とうを　きめるばんが　きました。それは　ぼくと　みつるくん　でした。また　ぼくが「かつかな」と思いましたが「五　たい　四」で　ぼくが　まけました。二とうに　なりました。

とうとう　しあいが　ぜんぶ　おわりました。

一とうは　みつるくん　二とうは　ぼく　三とうは　さとしくんでした。

やっぱり　みつるくんは「強いな」と思いました。

たっきゅう大会

二年　池原　けい子

二月十六日に　こうどうで　たっきゅう大会がありました。二年生から六年生まで　みんな　こうどうに　あつまりました。そうして　赤・白　にわかれて　すわりました。

わたしは「白」　です。

はじめに　でる　せんしゅは　白は　おさむさん　赤は　みつるさんです。二人とも　いっしょうけんめいれんしゅうしています。「ピー。」とふえが　なって　しあいが　はじまりました。おさむさんと　みつるさんは　いっしょうけんめい　ピンポン玉を　うって　います。おさむさんが　かちました。

つぎは　よう子さんと　よしみさん　です。よう子さんは　長い間　はじかで　やすんで　いたので　よしみさんが　かつかなと思いました。どちらも　じっと　ピンポン玉を　見ていました。よう子さんも　いっしょうけんめい　がんばりましたが　とうとう　よしみさんに　まけました。

そのつぎは　えいじさんと　つよしさんです。わたしは　つよしさんが　かつかなと思いました。でも　えいじさんが　かちました。

こんどは　わたしのばんです。あいては　たか子さんです。ピンポン台の前へでました。たか子さんは　おっかない顔をして　わたしを見ていました。

わたしは　たか子さんに　かとうと思いました。いっしょうけんめい　がんばりました。たか子さんも　つよいのです。なかなか　まけません。でも　おわりに　わたしは　かちました。うれしくて　うれしくて　とびあがりました。おうえんしている人たちも「ワア　ワア。」と手をたたきました。

さいごは　白が　さとしさん　赤が　しんさんです。わたしは　さとしさんが「かてばいいな。」と思いました。でも　さとしさんが　まけました。

これで　しあいが　おわり、白は　三人　赤は二人かちました。赤は　二人かちました。白は三人　赤は二人で　白がかったので、とても　うれしかったです。白のおうえんした人も　うれしそうでした。　でも赤のおうえんした人は　がっかりしていました。

ねえちゃん

二年　水越　ただし

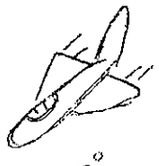
ぼくの　ねえちゃんは　学校から帰ると　すぐにそろばんじゅくに　行きます。帰ってきたら、すぐに　べん強をします。それから　ごはんを食べて、さげんのよいときは　ふろに　はいって　ねます。きげんのわるいときは　ふろに　はいらないで　ねます。べん強の　おわったときは、ときどき一せ

に あそんで くれます。
ぼくは ねえちゃんと どきどき けんかもします。それは どういうときかというと、ほとんどテレビの ばんぐみです。
ぼくは
「げっこうかめん。」
ねえちゃんは
「レモンの天し。」です。
ぼくが「げっこうかめん。」をみていると ねえちゃんがきて「レモンの天し。」にします。ぼくは
また「げっこうかめん。」にします。ねえちゃんが
また「レモンの天し。」にします。
ぼくが まけたときは、じいちゃんのへやへいって「げっこうかめん。」を見てきます。
でも ねえちゃんは、ときどき、ぼくに あめをくれたりします。だから ぼくは ねえちゃんが
すきな ときも あります。

おとうと

二年 青木かつみ

ぼくの したに「久克」という弟が います。
いつも つみ木で あそんで いるので つみ木で つくるものは なんでも じょうずに つくります。けれど たまに ぼくの わからないものを つくることもあります。
テレビのまんがを みることも 大すきです。まんがを みながら ねているときも あります。そんなとき ぼくは ふとんを だして かけて やります。ひさかつの ねている顔は とても かわいい顔です。だから ぼくは いつも ねたときは ふとんを かけて やります。
でも けんかを することも あります。
このあいだ ぼくが とこやへ 行くとき ひさかつも 一しょに ついて きました。おみせやの 前へ くると
「にいちゃん なんか 買って。」
と いいました。ぼくは
「だめ。」といいました。けれども
「いやだ。買って くれんがなら おかあさんに いってやるぞ。」
と、いって なかなか いうこと ききません。
ぼくは
「そいがなら、おいて いくぞ。ひとりで こい。」
といって 歩きだしました。ひさかつは なきそうな顔を しながら だまって ついて きました。ぼくは かわいそうに なって
「ひさかつは いい子やな。」
といって 頭を なでて やりました。



プラモデル

三年 池原浩幸

ぼくは、プラモデルを作るのが 大すきです。しんせきの 子どもを作るのも すきです。なぜかというと、ぼくが 保育所の青組のころ 五十円くらいの プラモデルを買ってもらって ひとりで作ったことがある。それから すきになったのである。
ぼくが大きくなり、だんだん高いプラモデルを買うようになり、三年生ごろには たくさんになり お正月に しんせきの友だちに 少しあげました。
とくに高いのは 五百円くらいで、一番やすいのは 五十円くらいです。買う日は たいてい 日曜日で 形の良いにいったのを えらびます。
作る時間は 安くて かんたんなものは、五分か十分位で できます。高くて むずかしいのは、三十分から四十分は かかります。できあがると、はこにはいるプラモデルは、はこにいれ はいらないものは はこにのせて たなにかざっておきます。
でも作るのがいやになることがあります。バネやゼンマイのかんけいで こわれたりするときです。
でも 一日や二日たって 作ってみると じょうずにできることがあります。
この間、おじさんに ウルトラホーク一号という プラモデルを 買ってもらいました。つまり ジェットキのような ひこうきです。まず 一つ一つの部ひんをとってから 作りはじめた。
はじめに前のはねとはねを はりあわせた。つぎに どう体を 作っていると、どうしてそうまくいかない。おじさんに作ってもらうと かんたんそうに作ってくださった。それから びょくをつけてから おふろ場の方へいき 水を少しくんで その中に シールを入れ 三十秒くらいまって ひこうきの いろいろなところへ シールをはり、ドッキングさせて できあがりです。
ぼくは プラモデルを作ったり、あそんだりするのが だいすきです。

しんだ チビ

三年 長島聡

「さとし、早くこい。」
な屋から おにいちゃんの声。ぼくは はやくいきました。おにいちゃんは、
「チビってよんでも ニャーゴと いわないんだ。」
と いいました。ぼくも
「チビ。」
と よんでみました。
「ニャゴー。」
と いいました。おにいちゃんは、
「ニャーゴというけど 右にいるけど 左を見て ニャーゴというんだ。」
と いいました。

チビは いつもだったら にぼしのところを見るのに、左にやっても 右にやっても 見ません。
「子どもを 生むからだ。」
と、ぼくが いうと おにいちゃんは、
「ちがうよ、子どもを 生むとき 目が見えなくなることって ないよ。」
と いいました。
チビは じっとして うごきません。 おにいちゃんは
「チビのはかって どうかくのかなあ。」
本を はぐって
「はか、はか、はか。」
としらべて 木に「墓」と漢字で 書きました。
ぼくは、おかあさんに 知らせました。おにいちゃんは、
「一九七一年とかけ。」
といいました。そして
「みはりばんしとれ。」
といって どこかへいきました。チビが おかしいので、
「おにいちゃん。」
と いったけど、返事がありません。おかあさんが
「きてじゅうい よぼうか。」
といって 電わを かけたが ゐすだったので くすりやさんに かけました。
「ねこのくすりは ありませんか。」
とききました。おにいさんが とりにいってきて
飲ませましたが しにました。だけど はらの中は
「うごいていました。それで ぼくは
「いきているのかなあ。」
と 思いました。おかあさんは いいました。
「あかちゃんは まだ しんでなかったので はらの中で うごいているの。」
ぼくは チビが しんだので かなしかったです。

ぼくの へや

三年 須沢 ひろのり

ぼくのへやは 二階の 洋間です。へやには、つくえ・本だな かがみなどのものが あります。でも いつも ぼくのへやで べんきょうするわけでは ありません。というのは、寒いときだったら、こたつが できないからです。寒いときは ねえちゃんの へやへ いって べんきょうを します。
ぼくの へやの 南がわに まどが あります。そようはないし カーテンも はって ありません。ひろさは、たたみが 四まいとはん分です。それにおし入れは、どのへやも 一つずつなのです。ぼくのへやにも ありますが、戸が つけて ありません。
この間 戸が はいっていないものだから、ねこが おしいれの下のだんへ いって しょうべんを

こきました。おしいれのものがぬれました。
ぼくのへやで 一ばんいいのは 電きです。それは 大きくて 明るいからです。はじめは、シャンデリヤが ついていましたが うちの人が
「これくらいから、ほかのにしなさい。」
といって かえられたので、ぼくは がっかりしました。でも百ワットの あかりから、五十ワットナワット ときえる 四だんしきの電きで シャンデリヤよりも いいです。

朝

三年 吉田 好逸

朝 おきて見ると、
太陽が でて 明るかった。
きのう ふった雪が
ピカ ピカ 光っている。
空には わたがしのような雲が
うかんでいる。
学校へ いって 氷の上を すべった。
あんな きれいな 氷が
どんどん ほしいなあ。

おかあさん

三年 長田 聡美

わたしのおかあさんは、夕方つかれて、家に帰ってこられます。わたくしは おかあさんが 会社へ行かれるとき、
「おかあさん、今日も は医者へ 行ってくらあけ、早く 帰ってきてや。」
と 言います。 たまに言うのを わすれたときは
「電話で
おかあさん、今日 早く帰ってくらあ、今日も
はいしゃに 名前書いとくが。」
と おかあさんのいる 扇原工業へかけて聞きます。
「今日いいちゃ、でも おそくなるから、先 ごはんたべとらっしゃい。」
という おかあさんの声と いっしょに
「ガタン ガタン。」
という きかいの音が なっているので、よく聞えません。
それから 弟のたかしと こういいながら あそんでいました。
「たかし、おかあさん おそいなあ。」
「ぼく はらへった。」
と なきだしそうな顔を しながら おかしを食べて おかあさんの帰ってくるのを まっていました。
その日は、おばあさんが おんせんへ 行って

るすなので おかあさんが きてから ごはんを
たべました。
おかあさんは、おとうさんの車で 帰ってこられ
たのです。

朝

三年　野口　とおる

朝 おきて 雪の上に 登ると、
雪が コチコチ だった。

ぼくは スキーを 持ちだしてきて すべった。
ずるんと すべり ころんだ。
おしりが ぬれていた。
つめたかった。
雪は キラキラ かがやいた。
ためいきをすると、
白い いきが 見える。

上を見ると
太陽の光が チラリと
目に はいった。

ぐうっと せのびをした。
朝の くうきは 気もちがいいな。

ほし空

三年　扇原和美

まっくらやみの空だなあ。
見あげていると
まっくらやみの中に
まきこまれるようだ。

あっ、ほしが でた
なんて あかるいんだろう。
あのほしは、あかりかもしれない。
もう少したつと もっと 明るくなるだろう。

よるの風は、さわやかだ。
あっ、ほしが おちていく。
きんのつばめが おちるようだ。

にじ

三年　青木　ますみ

雨がやんだ うすぐらい空に、
青、赤、黄、緑の きれいなにじがでた。
山の上を 七色のはし。
「はやく 青い空になりなさい。」
と いうように。
うすぐらい空は、
「ザー ザー ザー。」と 大雨をふらせて、
にじを けしてしまった。

いもうと

四年　藤塚徹郎

妹は、ぼくといつもけんかをします。この前ぼくが、チョコレートを持っていると、妹のえりチグ、ぼくのチョコレートをとっていきました。ぼくはおこって、妹が持っていたチョコレートを、とりあげました。

妹は「おかあちゃん、兄ちゃんチョコレートとっていったよう。」と泣きました。

ぼくは、かわいそうになったので、チョコレートを半分やりました。それで妹はやっと泣くのをやめました。

わたしの父

四年　長島ひろみ

わたしの父は、朝早くから晩おそくまで、一生けんめい仕事をしている。そんな父をみていると、なんだかかわいそうになってくる。

それで、私も時々父の仕事を手伝う。

父はもう五十才になるし、あんなに仕事をするとつらくないだろうかと思う。

真けんに仕事をする父、私はそんな父が大好きだ。だから、できるだけ長いきをして、仕事でもがんばってもらいたいと思っている。

ねこと犬

四年　木越久志

ぼくちのねこは、ずっと前にねこやなぎを食べて死んだ。その時四ひきの子ねこを残してりった。そのうち、一ぴきはかぜを引いて死んだし、もう一ぴきはふろばの火をもやすところで死んだ。あとの二ひきはゆくえ不明になった。

ぼくちたは、ねこのほかに「白」という犬もいた。りたずらものでぼくの手をかみつこうとしたり、チェーンをはずしておいた時、いとのしりたかみつりたりした。

それで、おかあさんはまた人にかみつりたら、いけないといって、役場へつれていってころしてもらった。しかたがなかったけど、ぼくはとてもかわいそうだった。

書初大会

四年　大田三郎

二月十一日は県の書初大会でした。朝先生の車で入善駅までのせていってもらいました。

駅の売店でガムを買い、汽車に乗ってからわけて食べました。

生地につくとトトロ、黒部につくと三日市楠林の工場が見えました。魚津、東あめりかが、なめりか

ゆ、米橋、東富山、富山貨物駅を通ってやっと富山につきました。富山駅の北口から出て、体育館まで歩いていきました。

体育の中にはいるとすぐかいだんがあって、二階へあがって窓からみると、下新川の席は三階のはしでした。席につきながら

「ぼくたちはいちばんいいなあ。」

と、ぼくはつよし君に言いました。

奥田からはじまり、ぼくたちは一番さいごでした。ぼくは、つよし君と、よしほさん、ちはるさんといっしょに書きました。紙は二枚だけあたりました。

終わっておいるになると、つよし君とちはるちゃんと、竹内先生といっしょに、中央通りのドンとりう店にはいりました。ドンの中は地下でした。中にはニャンデリアと、きれいな川がありました。川の中には一円や十円や百円のお金がはいっていました。ドこでぼくは、お子さまランチとカレーライスを食べました。つよし君もぼくといっしょのものを食べました。

かえる時に、ユニーでバナナを買ったり、クリームをしたりしてかえりました。

おじいちゃん

四年　前田茂樹

ぼくはおじいちゃんが大好きだ。

この前県方へ行く時、ぼくもつれていってくれた。一時間ほどして県方についた。県方の外のふんすいはとても美しかった。

県方の中へはいるとたくさんの人がいた。ぼくはずかしくてたまらなかった。二かいに上がると、おじいちゃんはぼくに

「ぼうしとコート持っていてちょうだい。」

といって、へやの中にはいっていった。ぼくはぼうしとコートを持ってろう下で待っていた。十分ほどたつと用じがすんだのか、おじいちゃんはへやからでてきた。

外へでると、ぼくは

「おじいちゃん、これから大和へ行こうよ。」

といった。すると、おじいちゃんは、

「よし、ちょっとといっか。」

といった。それでぼくは、やっぱりいいおじいちゃんだなあと思った。

大和につくと大和はやすみだった。ぼくは、

「つまらないなあ、来てそんした。」

と、ひとりごとを言った。するとおじいちゃんが、

「大和が休みなら、どっかへいっか。」

といった。それでぼくは

「プレーヤー買ってよ。」

といった。そしたら、

「買ってやろうか。」

と、おじいちゃんがいった。

そして、ステーションデパートで、尾崎紅葉の

レコードを買ってもらった。

かえりに富山駅でしばらく待っていると、中山教頭先生に会った。先生は、

「よう、茂樹君か。」

といわれた。そしたら、ぼくはにやにやしてうなずいった。それから、中山先生とおじいちゃんとぼくといっしょに汽車でかえった。

ぼくは、やっぱりおじいちゃんはいい人だ。まるで天国へ行ったみたいだと思った。

おじいちゃん、もっともっと、長生きしてちょうだい。

大失敗

四年　田又治代

今日、私は学校で60点の算数のテストを、返えされました。そのテストはまちがったところを、なおしてこなければならないので、家へ帰るとすぐテストなおしをはじめました。私がこたつの上でやっていると、おかあさんがかえってこられました。おかあさんは、すぐ算数のテストの点数を見て、

「治代、60点なんかとってきて何しとるが、もっと勉強せんとだめやぜ。」

と、いわれました。私はくやしかったがに、と思いました。

そして、次の日は日曜日だったので、おとうさんの仕事を休みでした。私はきのうの夜のことを考えて、

「また、なんとかいわれるがじゃなかろうか。」

と思って小さくなっていると、おかあさんが、また

「本に、60点なんかとってきて、はずかしくないがけ、算数もっと勉強せんにやだめやぜ。」

といわれました。私は勉強なんかあまり好きでないから、

「あ、あ、またこいこと言い出さした。」

と思って聞いていました。

しばらくすると、おとうさんが入善へ行くといわれたので、おかあさんは思い出したかのように、

「あんた、どうせ入善へ行かなら、治代の問題集買ってきてくれっせ。」

といわれました。私はそれを聞いて、

「あっ、買ってきて。」

といいましたが、心の中では、

「いやだなあ。」

と思いました。

数時間たっておとうさんが、かえってこられました。その時にはおかあさんが、おられなかったのでホッとしました。おかあさんがおられたら、

「治代、ちゃんと勉強せっしゃい。」

と、いわれたと思ったからです。

おとうさんが買ってこられた問題集は、学校で毎朝やっている、十分間ドリルとよくにていて、算数トレーニングというものでした。

「私は、おねえちゃんに、
「毎日、何ページやらや」
と聞くと、おねえちゃんは、
「ニページだよ。」
と言いました。それで、とにかくその日は、どうにかニページやったのですが、今度はおねえちゃんが、
「四ページずつかけよ」
といいました。それなのに、私は四ページかかなかったので、おねえちゃんに、
「ちゃんと、毎日四ページずつ書かんにや、今日かかんだから、あした全部で八ページかかんなんぞ」
とりゆれました。私はそれを聞いて、この分じゃとても、つづきそうにないと思いました。
そして、なんで60点の算数のラスト、おりあさんに見つけられたんだろう。あんな大失敗さえしなかったら、こんなにくごかんなかったのになあと、思いながら、毎日いやいやドリルを書いています。

雪だるまをつくりはじめた

四年　吉田敬子

今日、ぎょう間の時間に雪だるまをやった。男の子たちは、うまくやってたが、とちゅうで
「裕子ちゃんたちがやりあた。」
といって、雪だるまをつくりはじめた。それで私もやあたが、男たちはまだしっこく、雪をなげてきた。
それからフットして、裕子ちゃんが、雪だるまをつくっていると、男たちが裕子ちゃんめがけて雪をなげた。裕子ちゃんの目にあたったので、裕子ちゃんが泣き出した。
そしたら、裕子ちゃんが、
「私たちやめたがに、なんでそいことすらめ」
と、男たちにいった。私はそれを聞いて、裕子ちゃんもいいとこあるなあと思った。
それからしばらくすると、べんがなったので教室へはいった。

お手玉

四年　池原しのぶ

家庭科クラブでお手玉を作ることになった。できたことはできたが、うまくいかない。まっすぐぬう所はいいが、横がむずかしい。学校で二個、家で三個作った。ところが、大きいのから小さいのがある。
私は、はらがたってこのごろは作っていない。でも今度の火曜日まで、仕上げなければならない。だから、ボツボツやろうと思っている。
真由美ちゃんにみせてもらったら、なかなかうまい。私はどうして「いりがにならんのだろう」と思いながら、もう一度つくってみようと思った。

「チコ」の思い出

五年　青木三恵子

ある日の夕方、姉が子ねこを持って来た。それはたしか、わたしがまだ保育所に通っていた頃だった。走ると小犬のように、毛がふわふわした目の大きな三毛ねこだった。みんなで、いじくり回し取り合いのけんかのようだった。母が「チコ」と名づけた。
このように、チコが来てから家の中が一段とにぎやかになった。
わたしの母は、あまり動物が好きでなかったので、チコに対しての「しつけ」はとてもきびしかった。
わたしたちが、ご飯を食べていても戸のしきいより絶対に、こちら側にはこないで、両足をそろえて目を細めながらうらめしそうに見ているだけでした。その反対に戸をあけると、もうご飯がもらえるのかと思って玄関にとびだしていく。そして自分の食器の前に坐って「ニャーゴ、ニャーゴ」と鳴いてねだった。よその家のねこは、こっそり自分で戸を開け残ぱんをあさりに来るが、チコは、ばかのかりこうなのか、どんなに軽い戸でも開けようとも出せないで、ただそこに座っているだけだった。
だから、お客さんが来ると感心して帰って行かれる。それがまた、わたしの自まんの一つでもあった。
このようにりこうで、行ぎのよい「チコ」が、大失敗した。ずうずうしくも、かまどやふとんの上で子ども生んだのだった。なかげ母にさんざんしかられた。それからは、かまどのふたがきらんとしめられるようになった。
また、「チコ」はわたしがさびしい時になぐさめてくれる。
父と母は仕事で、姉達は学校へ行っている間、わたしが一人なので、こんな時には「チコ」をこたつの中に入れてやる。すごく喜んでゴロゴロところがったり、わたしにじゃれついたりすることもたびたびあった。
それから、わたしがどこかお使いや遊びに行って帰って来て「ただいま」というと、どこにいたのかわからないが、どこからでもむかけて来て足にからみつく。ちょっと、うるさい気持もするが、きっとさびしかったのだろうと思うと、一層かわゆくなる。
時々、「チコ」の子ねこを近所の人がほしがるので、あげるが、じきにもどって来る。でも、それが、とてもかわいいものだった。
それから、一、二年間過ぎて、冬の間父の仕事の関係で入善の家で住むようになった。父と母は、大工さんが家を直しに来ていられたので時々、荒又の家へ帰っていたが、わたしは入善にいたので、「チコ」の様子がさっぱりわからなった。
それから、荒又の家に用事があったし、「チコ」のことが、大変心配になったので帰って見ると、あれほど仲よしだった「チコ」の泣き声も聞えず姿も見

えなかった。おそらく、寒さとさびしさのために、どうしようもなくなり、どこかへ行ったのか、それとも死んだのか、いっこう姿を見せなくなった。

もうすぐ暖い春がやって来るというのに、ほんとうにかわいそうなことをしました。もっとかわいがってやればよかったと、「チコ」の写真を見ながら、過ぎ去ったありし日のことが思い出されてなりません。

今、こうしている間にも、「ニャーゴ、ニャーゴ」といって、ひょっこり帰って来るような気がしてなりません。

耕地整理

五年　前田　憲二

学校へ行くとちゅうで、いつもっグワァー、グワァー」という、すさまじいブルトーザーの音がします。

これが耕地整理です。ぼくの地区は、去年で終りました。このすさまじい音は、いつ聞いてもいい音です。運転手が、しんけんに機械を動かしています。

一方、向側の方では、男の人や女の人がいっしょうけんめいに、スコップを持ちながら土を掘っています。このようすを見ていると、まるでたくさんなありが、巣へえさを運んでいるような感じでした。じっと、立ちどまって見ていると、こちらまでいそがしくなるような気持でした。

向側を見ると、土の山がいくつもできていました。「一つ二つ……」数えきれないほどたくさんあります。

しかし、あまりブルトーザーの動きばかり見ていると学校へ行くのがおそくなってちこくをすることになるので、しぶしぶその場をはなれました。

心の中で、明日また見に行こうと思いながら。

次の日また見ました。いつもぼくは、三日ぼうずのくせがあり、すぐやめてしまうのですが、よほど気に入ったのかむ中で見ていました。

耕地整理は、今までのようなせまい田では機械を入れ、労力を少くなくして仕事の能りつを上げることが出来ないためにやっているのだそうです。

耕地整理が終った後は、広い田に大きなトラクターや、コンバインなどが入り、わずかな人手で農業がなされることを思うと、一日も早くその日の来るのが待遠しい気持です。

給食週間に思う

五年　松田　務

ぼくたちの学校の中で、給食の食べ物について、好ききらいをするものが多い。

そのためか、毎年給食週間になると、学年別に、献立を立てる。その時、「うどん」とか「やきそば」などの声が出て、とてもにぎやかになる。

だから少々、にぎやかでも、一年に一度しかない給食週間で自分達の好きな献立が作られるのだからよいと思う。

又、この週間の機会を利用して、好ききらいをしないというような目標を立てて、少しずつでも強い身体を作っていくことが、ねらいの一つだと思う。

それから、もう一つのねらいは、給食のおばさん達への感謝の気持を表わす週間でもある。

ポスターや標語を教室や廊下に、てん示するのもそのためであると思う。

ぼくたちの学級では、給食を残すものばかりではないが、よく見るといつも必ずといってよいほど、おかずが残っている。

給食は残してはいけない。おばさん達の心がこもっている食物だと思うが、一日たつとすっかり忘れてしまう。でも、このようなことは当然のことで耳新しいことではないが、こんなことを思う自分になったと思うと、考え方が良くなったのだと思う。

つまり、給食週間とは、おばさんたちへの感謝の気持をいだくことと、好ききらいをせず、強い身体を作ることが目標だと思う。

標語

「給食で栄養を取り、おばさんへ感謝の心」

水のあたたまり方

五年　稲場　晃

今日、理科の勉強で「水はどのようにしてあたたまっていくのだろうか」ということを学習しました。

実験をする前に、先生は

「水も金物（固体）のように、じゅんじゅんに熱が移っていくか。それとも、ちがった伝わり方をしますか」

と、聞かれました。

すると、ぼくたちの大体の者は、金物のような伝わり方をすると答えました。

しかし、浩志君は、それとは反対に、「上の方から、あたたまる」と、いいました。

すると、先生は、

「どうしですか。」

と、聞かれると、

「ふろがわく時、上の方からあつくなる。」

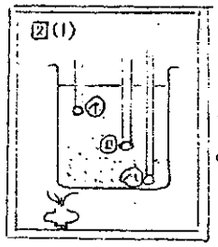
と、言いました。

なるほど、そう言えばぼくが、いつかふろのわきぐあいを見に行った時、上の方が熱くなっているのに、下の方がまだたかったことを思い出しました。

そこで、このことを確めるために、二つの実験をしました。

その一つは、ビーカー（二〇〇cc）に水を三分二ほど入れ、その中に、おがくずを少し入れて、アルコールランプ

であたためるのです。第一図のように、温度計を置き、水温の変り方を調べて見ました。



五分間ぐらいすると、中に入れた「おがくず」が、上の方へ動き出し、ハの場所の「おがくず」は、イの所へと動き出しました。

しばらくすると、だんだんその動きが活発になり、はじめ水が「ふっとう」するころになると、ぐるぐると「おがくず」が回りはじめました。

一方、イロハの温度の変わり方を調べていると、イが一番高く、ハが一番低く、ロはイとハとの間でした。

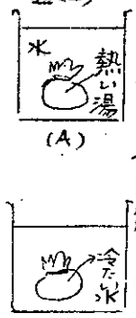
この実験で、わかったことは、水があたたまる時、上の方から熱くなる。又、あたたまる時、ぐるぐるまわりながら熱が伝わる。この伝わり方を「対流」というのである。

それでは、どうして暖められた水は、上の方へ上がって行くのかと、先生が質問されると、誰れかが、軽くなったからだと説明しました。

ぼくは、四年生の時物をあたためると体積がふえることを学習して知っているが、軽くなるということがわからなかった。

そこで、次に第二図のような実験をしました。

図(2)



水そうA、Bの中に、水道の水（二十三度C）を入れる。

Aの水そうの中に、ポリエチレンのふくろの中に熱い湯を入れて口をとじ、水にしずめて手をはなすと、浮きました。

一方Bの水そうには、熱い湯のかわりに、氷のとけた冷たい水を入れてAのようにして実験すると、下の方に沈みました。

ぼくは、この二つの実験から対流のおこるわけや、水のあたたまり方がわかり、理科の勉強がおもしろかった。

元日の朝

五年　神子沢　修

昭和四十七年一月一日の朝

起きて見ると、窓ごしに青い空が見える。

すこし、庭へ出て見ようかと思い庭へ出る。

つめたい北風が、はだをさす。

山を見れば、白馬岳を中心とした北アルプの山々

ふと、その上から太陽の光がさした

太陽の光が門松に当り、朝つゆがダイヤのように光った。

池を見れば、夏はしゃぎ回っていた黄ごいなどたましいのぬけがらのようにねむっているようだ。

年賀状もくるだろう。近所の人もくるだろう。

でも、山は何もいわない

ぼくは、そんな山がだいすきだ。

小学校生活

吉田智美

六年間の小学校生活。うれしくてうれしくてたまらなかったこともあれば、キャンプのごはん作りのように、うまくいかなくて手をやいた事もある。

一年生の大運動会のことである。私は、足がおそくいつもビリであった。

「次は、さかなつりです。」と、係のおねえさんの合図で集った。「よういドン。」私は、いっしょうけんめい走った。しかし、いつものとおりビリであった。

もう、あきらめながら、さかなをつった。みんな、つれなくてこまっている。その時、ヒョイと私のつりざおにさかながつれた。私は、天にも登るような気持ちで、高々とつりざおを上げて走った。もう、うれしくて、うれしくてたまらなかった。生まれて初めての賞だったからである。

反対に、苦しかったのは、六年生のキャンプである。

テントを張って、かまどを作った。はじめてはんごうでご飯を作るので不安である。紙に火をつけ、小さな木に移すのは簡単に思うが、実際にやってみると、ちっともうまくいかない。キャンプは楽しいものと思ってきたのに、まるで、苦労をしに来たようなものである。

しかし、自分たちだけで作るおかずは、特別の味がありそうに思えた。それに、あかあかと燃える火を囲んで歌をうたったキャンプファイアーの楽しさは、とても忘れることができない。

もうすぐ、小学校とも別れなければならない。そして新しい道を歩み出すのであるが、六年間の思ひ出を大切にしていきたいと思う。

サッカー

杉田秀博

六年になってからの事である。ぼくたち五・六年でサッカースポーツ少年団ができた。

初めて練習をしたのは、夏のはじめごろであった。新しいユニホームを着たときは、なんとなく、カッコよくて、うれしい気持ちであった。

いくらも練習しないうちに、富山へ行って試合をした。生まれてはじめてこんな大きな試合にのぞむので、なんだか有名になったような気持ちである。

試合場にはいって、

「よし、やるぞ。」という、ファイトがわいてきたが、結果は、7対0で敗れた。相手は、永年の経験を持っているが、ぼくたちのチームは、一か月しかやっていないのだから、負けるのは当然であるが、心の中

は、くやしさと、つかれで重苦しかった。今日の試合に備えて、毎日午前と午後の二回も練習してきたのだが、終ったことによって、何だか楽になったような気がする。

卒業しても、きっと練習の苦しさや楽しさの入りまじった気分を忘れないだろう。

手術

長島道代

早くも過ぎた六年間、いろいろな思い出がある。楽しかったこと、苦しかったこと。

五年生の夏の時の事です。

私がもっとも心に残る思い出は、手術したことです。アデノイド二つに、へんとうせん一つの三つです。

医者へ行くと、先生が、毎日のように、

「早く手術せんとだめやよ。あんたのは、ふつうの人とちがって大きいし、もうすこしで、くっつくがいげ。くっついたらもうだめやよ。」

と、言われます。わたしは、ドキッとしました。しまいには、もう、こわくてしようがありませんでした。

それから何日がたって、やっと手術をしました。手術室へ行くと三十分ほど待たされました。手術にとりかかって二時間ぐらいでやっと終りました。

部屋へ帰って寝ていると、あまりにも血が出るので先生に言うと、もう一度手術みたいなものをやらされました。

二日ほどたって、友だちが見舞に来てくれました。

とてもうれしかった。

そのほか、キャンプ、運動会、マラソン大会などの思い出が心に残っている。六年間踏みしめたグランドみんなといっしょに遊んだ講堂、しかし、小学校ともうお別れの時がきた。これらの思い出はいつまでも心に残ることだろう。

小学校の思い出

鍋谷一富美

私たちが入学したのは、昭和四十一年のことです。入学の日、母と手をつないで学校に向った。その日は晴れて気持ちのよい日でした。

学校の講堂にはいると、お姉さんや、お兄さんたちが、拍手で私たちをむかえてくれた。私は、ほんとうにうれしかった。

それから教室に入ると、担任の先生がこられた。それは、兄が習っていた杉田先生でした。

それから秋になって、大運動会がありました。私は白でした。いよいよ、私たちの五十メートル競走です。私は、晴美さん、恭子さん、よしほさんらの五人で走ることになりました。私たちは四回目です。

いよいよスタートです。ピストルが、パーンとなると、一せいにスタートしました。私は、何も考えずに夢中で走りましたが、結局は四位でした。

その次に、さかなつり競走がありました。私は、走るのが苦手だけど、つるのが得意でした。けれども、

だれかに追いこされて、二位になりました。その時は白が勝ったのを覚えています。

六年になって、キャンプがありました。はじめは、七月二十五日にあるはずだったのに、雨天のために、二十八日に延びました。

今でも、いちばん心に残っているのは、キャンプファイアーです。木や、栖草が、パチパチ燃えるのを囲んで、男女対抗の紅白歌合戦があり、その結果は、引きわけとなりました。

それから、テントの中でじゃべったり、怪談を聞いたりして寝ました。

その楽しかった思い出は一生忘れないでしょう。

はげましの言葉

島明義

ぼくが、二年生の時の事です。何の事だったか忘れましたが、講堂でみんな集った時に、ぼくが、二年生から代表に出て表彰されたのです。

名前を呼ばれた時に、ドキンとして、足が思うように前に出ませんでした。同級生の誰かがうしろで笑うのが耳にはいりました。前へ出て、一歩一歩段を登って行くと、みんなの笑い声が増すばかりで、ますます心はドキドキして今にも胸が割れそうでした。

やっと段を登りつめて止まると、校長先生が、

「しっかり、がんばりなさい。」と言われた。そのことばが、じーんと、ぼくの胸にひびきました。

その、はげましの一言が、今でも、ぼくの心に強く残っていて、ついなまけそうになると、ぼくの心を引きしめてくれます。

ぼくは、いつまでも、そのことばを大事にして、がんばって行きたいと思っています。

サッカー

坂東豊

六年生の夏のはじめに、スポーツ少年団ができて、五年と六年がまじって、練習することになった。

監督は、谷口さんといって、毛むくじゃらのこわい顔の人だったが、たのもしい人だった。

ぼくは、走るのがあまり得意ではないので、いつもひいひい言っていた。しかし、サッカーは、長時間走らなければならないので、力をつけなければならないと考えて、できるだけ、家へ帰る時は、走ることにした。

夏休みになると、朝の七時に練習が始まるので、ラジオ体操が終ると、すぐ学校へ走らなければならないのである。ぼくは、たいていいかさず行ったが、たまに休んだ事もあった。練習がきつ過ぎて、くたばりそうになったからである。そんな時には、足の関節がおかしくなって、ボールをけると、足が、ずきんといたんで、うまくいかないこともあった。

八月のはじめに、富山でスポーツ少年団のサッカー部が集って、試合があった。

ぼくたちは、姿黒崎とぶつかった。相手が強過ぎた

のか、ぼくたちにキャリアがなかったのか、とにかくこてんぱんに敗けた。残念だったけど、いっしょうけんめいにやったのだからくいは無い。

練習は、六時半ごろになることもある。のどがカラカラになるけど、水をのむのを禁じられているのでたいそう辛かった。シャツが、汗でべたべたになったけど、どうにかがんばり通した。

しかし、スポーツの精神やよろこびを知ることができて、良かったと思う。

先生の思い出　長島久美子

私たちが小学校に入学したのは、昭和四十一年の四月でした。

母に手を引かれ、道代さんといっしょに学校に向いました。私は、小学校のドアがどのようになっているかを少しだけ知っていました。でも、どのような先生がいて、どの先生に教えられるのか、全く見当もつきませんでした。だから、小学校へ入った時は、胸がわくわくしていました。

私たちの受持ちになった杉田先生は、たい、心やさしそうな人で、いつも、ほほえみを浮かべておられた。でも、時には、しんけんに叱られることもあった。

私が、小学校でいちばんこわいと思った先生は、杉本先生でした。

二年生の時に、杉田先生が病気になられ、代りに、杉本先生が一学期の勉強を見て下さったのです。私と恭子さんが、いっもいっしょにくっついているというので、先生は、よくくっつくなと言われたものです。そして、授業中に、少しでも話しをすると、すぐ立たされました。私たちふたりに対しては、特にきびしいように感じられた。私たちは、そのたびにおこっていたが、とても明るい人で、あの先生がいてよかった。と思ったこともあった。

杉本先生と別れるのが悲しいと感じたのは、二学期のはじめで、杉田先生の病気が良くなった時です。

杉田先生が野中小学校へかわっていかれる時も悲しかった。先生も私たちと別れるのが悲しいらしく泣いておられた。

水泳大会　中田博昭

六年生の八月に、入善町の水泳大会が行なわれた。

ぼくは、その日を目ざして、毎日、練習を続けた。

当日は、かなり雨が降っていて、非常に寒く、自分の番がくるまで、タオルをかぶってふるえていた。

ぼくは、五十メートル平泳ぎに出場した。ぼくたちの番が近づいたので、小さいプールで泳いでいると、場内アナウンスがかかった。ぼくはA組である。

スタート台に上がると、心臓が、ドッキンドッキンと鳴り出した。しん判の笛がピーッとなって、スタートが、「用意ー」と言うと、すっかり上がってしまった。

ぼくは五コースで、「ドン」と同時に、思いきり台

をけってとびこんだ。

一五メートルほど一位だったが、二十メートルでついにぬかれてしまった。ビリになるかな。と思うたが二位でタッチ、十けっ表に入れないかなあ、と思っていると、案外成績がよく、五十二秒七で三位になることができた。

リレーでは一校がきけんしたため、九コースで一度にやったが、八位で残念だった。

自転車のけいこ　上島美穂子

三年生のときに、父に自転車を買ってもらいました。学校から帰ると、グランドへ行ったり、日曜日には、家の周りとか、道路で、いっしょうけんめいに練習しました。

学校が終っても、宿題もろくにしないで自転車に乗りましたが、道でころんだり、川や、田んぼに落ちたりして、いざや手をけがだらけにしたことも、ちょいちょいありました。

そんな時には、私は、もうだめだ。と思いました。せっかく、お父さんが買ってくれたのに……と、がっかりしました。

しかし、次の日になると、こんどこそ乗られるようになるぞ。と思って練習しました。三年生だと言うのに、乗れなければはじだぞ。と思っているうちに、ふらふらしながら、やっと乗れるようになりました。

その時のうれしかったこと。家へ帰ると、すぐ、おばあちゃんに、「できたよ。」と言うと、「あたりまえやにか。」と言いました。

それから、自転車で買物をするようになったけど、ひっくり返ると、卵なんか割れるので、心配なときもありました。でも、みんなに、「やあい、乗られんがよ。」と言われなくてよいので、気持ちが、すっきりしました。

キャンプ　久保晴美

六年の七月に、先生方と、六年生二十三名とで、舟川上流の六谷へキャンプに行った。

そこは、川が流れていて、石ころだらけの所だったので、こんな所でテントを張ったり、食事の準備ができるのかなと思った。

夕食が終って遊んでいると、キャンプファイヤーが始った。パチパチと燃える火を囲んで、男女に別れて歌合戦を楽しんだ。

なかなか眠れないので、恭子さんといっしょに、校長先生と竹内先生の所へ行って、キャンプファイヤーや、かじか、星などについて、いろいろおそわった。はじめは面白かったが、だんだんたいくつになったので、テントに帰った。

テントの中にいると、川の水音がすごくきれいに聞こえた。それを聞いていると、なんだか淋しくなり、家へ帰りたくなった。でも、都会へ行くと、遠い所まで行かなければ、静かで、美しい緑は見られだろう。

その点田舎はいいな、と思う。
翌朝、ご飯を作ったが、なかなかうまくいかない。しまいには、もういやになってしまった。もっと、家の手伝いをして、作り方を習っておけばよかったなあと、くやんだ。でも、食べてみると、けっこうおいしかった。自分たちで作ったからだろう。
キャンプをしている時は、家にいるのと比べて、ほんとうに苦しいと思ったが、今になってみると、ほんとうに楽しい思い出である。

ぼくのあだな

君島　剛

ぼくは、あまりあだなを持っていないつもりでしたが、このごろ、「ツンドラ」という寒帯地方の名を、誰かが言い出したのです。
このあだなは、女の子などがよく口にするようですが、そのいわれはごく簡単なものです。ぼくの名前の「つよし」の「つ」が、「ツンドラ」にもついているというだけのものです。
ぼくは、あだなを言われると、しゃくだから、ただちに、その相手のあだ名を言ってやります。Aさんのあだ名は、「鼻毛男」。Bさんのあだなを「ぶたマン」Cさんのあだなは「そばかすプッチャー」というふうにあいきょうと、楽しさのあるあだなを、ぶちまけてやります。
あだなを呼ばれると、はじめのうちは、いやな気がしたけど、あとになるにつれて、面白いような気がしないでもありません。
ぼくは、あいきょうと楽しさのあるあだなを、もっと、もっと発明してやろうと思います。

思い出

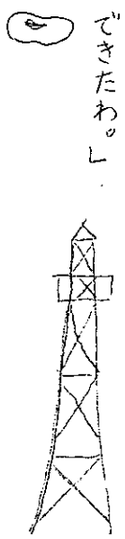
田又　稚二

二年生の時である。杉田先生がけがをして入院された。
ぼくと、母と、ひふみさん親子、正子さんの五人で見舞に行くことになった。入善の駅に着くと、芳博君と美津明君がいた。男は、ぼくひとりかな、と思っていたのに、連れができて心強かった。
病院に着くと、美津明君が、自分の小使いで、先生のためにきれいな花を買ってきた。その時ほど、美津明君がりっぱに見えたことはない。先生もたいそううれしがっておられた。
それからしばらく話をしてから帰った。
杉田先生のかわりに、杉本先生がこられた。その先生は、たいへんきびしくてこわかった。ぼくなんか、ずいぶんしかられた思い出がある。
「早く、杉田先生が帰ってこられないかなあ。」と思ったものである。
それから、しばらくして帰ってこられた。その時の杉田先生の生き生きとした笑顔が、今でも忘れられない。

苦しかった練習

上田　智美

去年の十一月に、私たちの学習発表会があった。そして、学習発表会は見事に成功した。それは、毎日の苦しい練習があって、はじめて実ったのだと思う。
私たちは、器楽合奏で三曲と、「アリババ物語」の劇をした。器楽合奏で、私は、五年生の女の子と木きんをやった。木きんは、私のいちばん苦手であったので、毎日毎日しかられてばかり。
発表会が、一週間後に迫っていた日のことである。五、六年生いっしょに合奏練習をしていた。橋場先生が、突然、「やめー」と言われた。そして、私たちの所へ来て、「お前たち、速いにか。」と、自分から火花が出るような声で言われた。
その日残って、鉄きん、木きんとピアノの速さを合わせる練習をした。「星の世界」の後半のところがどうしてもできない。すると、先生の大きな声が耳にひびく。何十回か繰り返して、やっとできるようになった。「まきばの朝」も、最後のところがどうしてもできない。
先生にはしかられるし、外は暗くなるし、涙は出るし、目からあふれる涙をふいて、けんめいに木きんのキイをたたいた。
「できた。できたわ。」



私はうれしくてうれしくてたまらなかった。鉄きんやピアノと合わせてやった。速さはピッタリ合った。予行演習のときである。「まきばの朝」の最後のところで、橋場先生が、「やめー。木きんの速さが合わん。」と大きな声で言われた。ふー、ドキンとしてとてもはずかしかった。
そんな事があってから、家で着でたたいて練習したこともあった。
いよいよ本番がやってきた。私は、胸の中がドキドキして、手がふるえていた。「今までの練習の成果を見せるんだ。」と自分に言いきかせた。
先生のタクトが、さっと動いて、メロディーがゆるやかに流れはじめた。私の手は、いつもよりはずっとなめらかに動いた。そして、合奏が終った。私はホッとした。幕がしまっても拍手が鳴り止まなかった。
私は、苦しかった練習のせいか、今でも三曲のふを全部覚えている。あの苦しくて、涙の出るような練習は、一生忘れられないだろうと思う。

友だち

長島　恭子

私と好美さんとは、小さい時から仲よしだった。この前までは、学校へ行く時も帰る時もいっしょだった。けんかをしても、一日たてば仲よくなっている。でもいまはちがう。
三年生頃のことである。学校から帰るのに、道代さんと、久美子さんがいっしょで、私と好美さんがいっ

しょに帰ると、智美さんがいとりで帰らなくてはならない。それで、だれかが、好美さんと智美さんをいっしょに帰らせようとした。だけど、好美さんは、智美さんと帰らないで、いつも私といっしょだった。私はこんな友だちを持ってよかったなあーと思った。

五年生の時、迎えにくるのをかわりばんこにした。好美さんが迎えに来なければならない時に、おそ過ぎたので、私が迎えに行った。次の日は、かわりに好美さんが来なければならないのに来なかった。

それから一月ほどたったある日の事、好美さんの順番なのに、おそ過ぎるので、私が行くと、もうすでに学校へ行ってしまった後だった。それで、とうとうけんかになってしまった。

でも、好美さんにも都合があったのだろう、と思って仲なおりして、今まで通りつき合っていた。

六年生の一学期の事である。ほんのちょっとした事でけんかになってしまい、学校の行き帰りはもちろんつき合うのも止めてしまった。その日から、電話もかかって来なくなり、心細くなった。

私は、久美子さんや道代さんがうらやましい。それは、小さい時から、ふたりの仲がこわれたりしないからだ。

私と、好美さんの仲も、もういちど元にもどせるものなら早く直して、いつも、いっしょに学校へ行き帰りして、仲よくつき合いをしたいと思う。

マラソン大会

青木 美津明

ぼくの学校では、毎年マラソン大会がある。一年生のマラソン大会の時のことである。

四年になる兄から、はじめからあまり速く走るなと言われていた。

はじめはビリでスタート、そのうちに、ぼっぽっ追いこして、半分ぐらいで二位になり、そのままゴールイン、一位にはなれなかったが、それほど、くやしいとは思わなかった。

二年の時はなかった。

三年の時は、きょりが短いので、はじめからスピードを出して走った。兄が、途中で「速く走れ。速く。」と応援に来てくれた。その時の成績は三位だった。

四年の時、今度こそは、と思ってがんばった。しかし抜こうとすると、前の者が寄って来て、ぼくの進行をさまたげるので、とうとう追い越せなかった。ぼくは、抜かれはしないかと後ろばかり注意していたからでもある。さいわい抜かれはしなかったが、結果は二位に終った。ぼくの前のやつがにくらしかった。

五年の時である。四年の時に前をふさがれたのだから、今度はやってやろう、と思った。そして、とうとうトップに立った。二・三位との差があまりないので心配だった。去年の時のしかえしとばかりに、二位の前へ出たら、平気でぶつかってきた。これではたまらんとばかり、途路をふさぐのを止めにした。そして、

ゴール直前の校門が見えてから、もうれつにラストスパートをかけて来た。ぼくは、負けまいと思って、歯をくいしばってがんばった。まさに、短きょり走と言った感じである。そして、とうとう抜かれてしまった。しかし、兄の小学校の時には勝てなかったが、六年より良かったので満足であった。

六年になって、十一月に、マラソン大会の計画の発表があった。今度こそは、と思った。その頃、ぼくはしごく調子が良かったためである。ところが、雨ばかり続いて、とうとう中止になってしまった。頭にきた。

こんどまた、あればよい、と思う。その時こそ一位になりたいと思っている。

友だち

池原 政信

たしか、二年か、三年の時であった。剛君と自転車で泊へ遊びに行った。

行きはよい天気で、剛君と面白い話をしながら行った。ぼくは、自転車で遠くへ行ったことがないので、とてもうれしかった。泊の町で、アイスクリームや、いろいろなものを食べながら、ゆかいに話し、大声で笑った。

帰りは五時ごろだったと思う。途中で道がわからなくなって、大分時間をむだにした。やっと見おぼえのある道へ出て、「さあ、行こう。」と思った時、いつの間にか、空一面に雲がひろがって、うす暗くなっていた。しばらくすると風が吹きつけてきた。しかも向い風である。その上、雨が降ってきた。

カいっぱい自転車をこいだが、さっぱり進まなかった。ぼくたちは、ひっしにこいだが、ただつかれるばかりで、思うように進まなかった。もうすぐ、まっくらになりかけていた。しかし、ぼくは、剛君といっしょだったので、とても心強かった。

ぼくたちは、五〇メートルほど進むと、足がつかれて、すこしおりて、引っぱらなければならないほどで、泣きたくなる思いであった。

やがて、むこうに剛君の家が見えたので、ぼくの家も、もうすぐだと思うと、足のだるさも、それほどには感じなくなった。ぼくは、剛君に、「あとすこしだ。がんばろう。」と言った。

剛君と別れて、家へ帰ると、ただ、ほっとしてうれしかった。しかし、家の人に、「今までどこへ行っていた。」としかられた。

今でも剛君と、笑いながら、その時の思い出話しをすることがある。

水泳大会

鍋谷 好美

六年生になって、初めて水泳大会に出ることになった。

毎日の練習のきびしさ、負けまけではなかろうかという不安、大会に出場できるうれしさ、などで、胸の中がいっぱいであった。

練習が始まった。五十メートル泳げない私にとって

それは、非常にきびしいものであった。あと十メートルぐらいで参ってしまう。四、五日たってからうつかり泳いでみると、楽に五十メートル泳げていた。私は練習のかいがあったぞ、と思った。

それから数日して、水泳大会が行なわれた。今日こそ、今までの練習をむだにしないでがんばろうと思った。みんな、いっしょうけんめいに練習している。私の横に上手な人がいた。私は、負けるのではないか。そんな気がした。でも、いっしょうけんめいに泳いで自分の実力を出せたら満足ではないかと自分に言いきかせた。

いよいよ、私の泳ぐ番がきた。胸がドキドキする。とにかく精いっぱいがんばろう。と思ってとびこんだ。夢中になって泳ぐ。横を見るようゆうなんか無かった。ようやくゴールにタッチ。大息をしながら、回りを見まわすと、私が一番だ。

「やったー・私が一等だ。」

私は、おどり出したいような気持ちだった。この喜びは、大事にしまっておこう。と思った。

私にとって、水泳大会の優勝は、六年間の中でいちばん心に残る思い出である。

犬と足

前田忠男

昭和四十三年の三月十六日のことであった。ぼくが二年生の時である。

いつものように新聞を配っていると、長島で、中ぐらいの茶色の日本犬が、急に飛びかかってきた。よけようと思ったが、犬の方がすばやく、ぼくの足にがっぷりとかみついて放さなかった。そこの家の人が出てきて、やっと犬をぼくからはなした。

かまれた所を見ると、別に血も出ていなかったが、家へ帰ってから、どうも痛いので、よく調べてみると肉が出ていて、くちゃくちゃに成っていた。

すぐに医者へ行った。全々歩けなくなってしまった。もちろん学校へも行けなかった。

それから一週間ほどして春休みになった。みんなが外でわいわいと楽しそうに遊んでいるのに、ぼくだけが、ぼんやりと見ていなければならなかったので、ほんとうに悲しかった。

一か月ほど医者へ通って、やっと、足が直った。ほうたいの取れた足をながめると、もう一方の右足に比べて細かった。それに、永らくじっとしていたので、からだがなまってしまって、気分もあまりよくはなかった。今でも、その時の傷あとが、大きく残っている。それを見るたびに、あの時の事が思い出される。おそらく一生忘れないだろう。

思い出

木村良穂

二年生の一学期のことである。私たちの担任の杉田先生が、病気になられて、学校を休まれた。何の病気だったかは覚えていない。

杉田先生のかわりに、校長先生、教頭先生のほかに

杉本先生がこられた。

わたしは、はしかで休んでいたので、杉本先生のことは、あまり覚えていない。ほかの先生にくらべて、勉強に対しては、こわく、きびしい先生だった。男の子たちは、けんかをしてはおこられた。みんな、杉本先生は、こわいなあ、と思っていた。

クラスの人が、杉田先生の見舞に行った。私も、そのひとりだった。杉田先生は、元気で、もうすぐ退院できそうだった。私は、「早く病気が直って、学校へこられるといいなあ。」と思っていた。

私が、はしかで、学校の予防注射がおくれて、たので、杉本先生といっしょに、入善の中央公民館へ行った。わたしいとりだったので、写真屋さんへ行って、杉本先生の写真をもらってきた。

それから、二学期の始めに、杉田先生がこられて、杉本先生がかわって行かれた。

キャンプ

水越正子

六年の夏休み前、七月二十八日から三十日にかけて舟川の上流へキャンプに行った。

真岩組のマイクロバスに乗って、学校を出発した。私は、てっきり、キャンプ地までマイクロバスで行けるものと思っていたのに、途中でおりて、かけを登っていった。重い荷物を持、上ったり下ったりするのに苦労した。それも、一度ならず、二、三度もしなくてはならない。

それが終ると、小高い場所を選んで、テントをはることになった。それも一苦労であった。地面をならして、小石をどけ、草を刈って下にしき、テントをはった。

すると、もう昼食の時間になっていた。

夜。あすの晩、キャンプファイアーをする予定だったのに、天候が悪いために、今晩することになった。

七月二十九日、

昨日は天候が悪かったのに、今日はだんだん晴れてきた。朝食が終ると、水遊びをすることになった。男子は、遠くへ行ったらしく、姿が見えなかった。

私たちは、近くの、だんだんになっていてつぼのようなところで遊んでいた。

そのうちに、テントの形がたるんできたので、なわを引いて直そうとすると、とうとう、丸つぶれになってしまった。私たちで、いくら直そうとしても、すぐにつぶれてしまう。しかたなく、男子がくるまで、そのままにしておくことにした。男子が帰ってくると、さんざんにしかられた。

夜、天候がよかったので、また、キャンプファイヤーをした。

七月三十日、キャンプ最後の日である。荷物をまとめて下へおり、二日前に来た道をもどった。

学校へ着くと、もう歩く元気もなかった。しかし、すごく楽しいキャンプであった。特に、キャンプファイヤーが心に残っている。

また、食事のしたくでもいろいろと苦心をした。スイカを食べて、ごはんが食べられなくなって、計画がめちゃめちゃになり、あらましごはんが残ったりした。苦労や、失敗はあったけど、すばらしく楽しいキャンプであった。

マラソン大会

甲田敏和

たいていの年は、マラソン大会がある。ぼくは、三年か、四年の時に賞状をもらったことがある。

ぼくは、マラソンはあまり早くないし、近頃は、あまりよけい走ると、足が痛くなることがある。

いつのマラソン大会も、一年から二、三年の順に出発し、六年が最後に行なわれる。そして、前の学年がついてから、次の学年が出発する。

五年生の時、はじまる前にいろいろと心配になってきた。それは、五年になると、きょりが長くなるために、途中で走れなくなるのではないか、と言うことである。それに、半分ぐらいを過ぎると、どんどんひどくなると聞いていたからである。

ぼくは、スタートしてから、はじめは、すごく苦しかった。

四分の一ぐらい過ぎたころ、うしろを見ると、女の人ばかりだったので、これはいけないと思って、いっしょうけんめい走った。すると、すこしずつ楽になってきた。最後は、七番で終った。走り終ると、足の筋肉が、相当に痛かった。

友だち

金森玲子

一年生のときである。

小形の女子と男子は、とても仲が悪かった。いちど大げんかをした。すると、先生が、

「男と女と、手をつないで行かっしゃい。」

と言われた。

今では、そんなことは、めったにない。今になってみると、その頃の自分が、はずかしく思われる。

わたしと、正子さん、智美さんとは、仲よしグループだ。そうなった原因は、五年生の二学期のとき、いっしょのグループになってからだ。学校の帰りも、いつもいっしょに帰る。教室でも、仲よしグループは、他にもあるが、わたしたちが、いちばん仲がよいだろう。

六年生の一学期のとき、良穂さん、秀博君、敏和君と、いっしょのグループになった。初めは、とても仲が良かったが、しばらくすると、仲が悪くなった。

やはり、私たちの仲よしグループの方が、いつまでも続いていてよい。わたしは、良い友だちを持って幸福です。

これからも、いつも仲よく、助け合って行きたいと思う。そして、一生忘れられないような、すばらしい友情を育てたいと思っている。

心

野口美幸

今年の二月十八日の夕方のことである。電話のベルが鳴った。

とっさに、受話機を取って、「どなたさまですか。」と、聞いてみると、京都のおじさんだった。話の内容は、「あす私の家へ来る。」と言うことでした。私は母の手に受話機を渡して、横で聞いていた。すると、おじさんは、「何もいらないから、さかなだけを用意しておいてくれ。」と言って、電話が切れた。

あくる朝、早く起きて、そうじをした。ふと気がついみると、もう、六時五十分になっていた。私は、心をはずませて学校へ行った。

夕方家へ帰ってみると、もうおじさんが来ていた。予定の時間よりずいぶん早かった。

しばらくして、親るいの人たちが集った。応接間でいろいろ古い話や珍しい話がにぎやかに始った。話の中におじさんが、

「あとしばらくしたらヨーロッパへ行くつもりです。」

と、言われたのが、強く心に残っている。おじさんはすこし自慢すぐくせがあって、「おまえたちは、そんな所へ行けないだろうと、口ぐせに言っていたからです。おじさんは、金持ちでいいなあ。」と思った。

この前は、シンガポール、ヨーロッパ、沖なわなど海外旅行をしているからである。

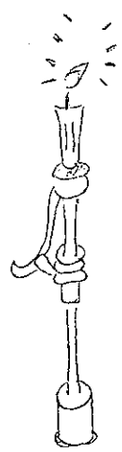
だけど、おじさんは、金持ちの割にはけちだと思う。家中で、そうじをしたり、さかなを買ってきたりしてもてなして上げたのに、お礼も言わなかったし、別にお金もくれなかったからである。

わたしは、お金を目当にもてなしたわけではないがやはり、お礼ぐらい言ってもらえば、気持ちがいいのに、……と思った。

母も、きっと、わたしと同じ気持ちだったろう。と思う。やはり、人間は、心の持ち方が大切なのだと、つくづく思った。

ぼくの夢 わたしの夢

こんな人になりたい



坂東豊

ぼくはブラジルへ行きたい。そして、森林を切り開き、その木で家を造り、新しくできた平野を牧場にして、牛と羊をかって、馬にまたがって、ゆうゆうと暮らしたい。

杉田秀博

ぼくは、飛行機のパイロットになれたらいいなあ、と、思う。飛行機事故は、こわいと思うが、その時は自分の腕を信じて、愉快に地球の上空をとびたい。また、これも夢だが、お金がたくさんあると、飛行機を買い、世界を一周したい。

中田博昭

ぼくは、将来アメリカへ行って、オリオールズのプロ野球選手になって、アメリカの殿堂入りをしたいのです。

藤島剛

ぼくは、大きくなったら、大規模な農業をやりたいと思っています。水田をたくさん作り、にわとりも何万羽とかいます。そして、海外へ、米や、にわとりを輸出して、金持ちになりたい。

田又雅二

ぼくは、やがて、一〇〇メートルの選手になって、オリンピックで世界新記録を出し、外国にも名の知れた選手になれたらいいなあ、と思う。

青木美津明

ぼくは、将来発明家になって、いろいろな発明をし、人々の生活をゆたかな楽しいものにしたい。そして、特許を取って、がっぽりとお金をもうけたい。

前田忠男

ぼくは、工場の社長になって、すばらしい製品をたくさん作り、外国と貿易し、いつも、外国へ行ったり来たりして、大金持ちになり、豊かなくらしをしたい。

島明義

ぼくは、大きくなったら、農業をやりたい。そして花をたくさん作りたい。ぼくの家の田んぼは、花に向いているようだから。温室を持って一年中花を咲かせて売ったり、また、方々の花作り農業を指導したり見物したりしたいと思っている。

池原政信

ぼくは、大人になったら、農業のおくれた国へ行って、技術を教え、その土地の人に好かれ、お金もたくさんもうけて、すばらしい生活をしたい。

中田敏和

ぼくは、はじめ船の船長になりたい。そして、だいぶお金がたまったら、家の仕事をしながら船に乗り、生活によゆうをもって仕事をしていきたい。

鍋谷一富美

わたしは、大きくなったら、人の役に立つ仕事をしたいと思う。たとえば、一人ぐらしの老人のめんどうや、幼稚園の保母さんのような人になりたい。

水越正子

わたしは、バスガイドになりたい。方々の土地をまわり見学する。ほんとうは、バスガイドよりもスチワーデスになりたいのだが、つい落するとこわいので、バスガイドの方を選んだ。

久保晴美

私は、将来美容師になって、みんなのかみの毛を美しくしてあげたい。そして世界一の美容師になり、弟子をたくさんもって、有名になりたい。

上島美穂子

私は、将来大きな店の洋服屋さんになりたいと思います。お客さんに、きれいな洋服で、すこしは値だんが高く、やぶれたりしないようなものを着せて上げたいと思う。

吉田智美

私は小さい時から、小学校の先生になりたいという夢を持っていた。そして、もしなれたら、生徒に親しまれる先生になろうと思っている。いっしょうけんめいに勉強して、かならずなってやろうと思う。

長島久美子

私は、将来子どもたちからしたわれる、保育所の保母さんになりたいと思います。そして、子どもたちに紙しばいをしてあげたり、ゆうぎを教えてあげたりしたいです。

金森玲子

私の夢は、保育所の保母さんになることです。もしなれたら、泣いている子をはげましたり、いたわったりして、やさしく、子どもになじんだ保母さんになり

たい。

長島 恭子

私は、将来美容師になり、たくさんの人のかみの毛をいじり、その人に合ったかみがたを考え、すべての人を美しくしてあげたい。

長島 道代

私は、将来お客さんから信頼される美容師になりたいと思います。そして、自分で考えたヘヤーを作ってあげることです。

野口 美幸

私は、大きくなったら、スチワーデスになって、世界中をまわり、いろんな国の人々と話をしてみたい。そして、各地の珍しい記念品を買い集めてみたい。

鍋谷 好美

わたしは、体操の選手になりたい。そして、できれば、世界一有名になり、世界中の人々を、あっと言わせてやりたい。

上田 智美

私は、そろばんの一級をとって、将来は、銀行員になりたい。強盗がはいるかも知れないが、せっかく、そろばんを習ったのだから、それを、発揮できるような職業につきたいものである。

木村 良穂

わたしは、看護婦さんになりたい。そして、病気の悪いくたちを健康なからだにしてあげて、病気のない国にしたい。

詩

つくし

上田 智美

雪がとけると、
土の中からひょっこり顔を出して
すくすくと伸びるつくし。
長くひょろひょろのつくし
短かくがっしりしているつくし
ろうそくのような形をして、
かわいいぼうしをかぶって
風にゆられて
フラダンスをしているようだ

雪げしき

長尚 久美子

向う一面に、つもった雪。
まるでペンキをぬったように、
家や木は、まっ白だ。
田や畑も、
野も山も
白一色で、動かない。
まるで、絵のようだ。
わたしは、この絵の中を、
ひとりで歩いてみたい。

中学生

上島 美穂子

もうすぐ中学生だ。
どんな友だちが待っているだろう。
制服を着て、
胸をはって歩くんだ。
中学生だと、いばって歩くんだ。

くるしいことや、悲しいことが、
たくさんあるだろう。
でも、私は負けないで、
がんばろう。

山

君島 剛

はるか遠くに雪をいただいた山、
むかしの事を、思い出させる山。
ムシャムシャ、
べんとうをたべる音。
べんとうばこを登山しているありたち、
そんな光景が、
山のむこうに浮き出てくる。
友だちと、おしゃべりをした日を
思い出させてくれる山。

生命

野口 美幸

木を植えたり、切ったり、
少しずつ自然が消えていく。
わか葉、花びら、ふかみどりと
おけしょうを変えて、
やがて、さびしく落ち葉となる。
だけど、木の生命は、失なわれない。
人の生命は、
炎から、くらやみへ、
そこから先は、
どうなるのだろう。

海

久保晴美

海は広いなあ。
海は大きいなあ
海は青いなあ。
海は、だれのものだろう。
海は、何のためにあるのだろう。
ゴミをすてる人、
魚をとる人
海水浴にくる人
海は、だれが作ったのだろう。
海の命は、永久に絶えないだろう。

学校の帰り道

前田忠男

学校が終わり、門を出た。
「こんな時に、いっしょに帰る人がいたら。」
ひとりで帰ると、たいくつなので
つくづく、そう思った。

山を見つめたり、
空をながめたり、
石をけったりして帰る。
だが、やっぱり、
「いっしょに帰る人がいたら。」
と思っているうちに、家へ着いた。

ぼうず頭

青木美津明

もうすぐ中学生
ぼうずにならなければならない。
床屋へ行った。
バリカンが、
「ガーガー」と音を立てる。
どんな顔になるだろう。
ぼくから、毛がはなれていく。
からだの一部が失われる。
バリカンの音が止った。
あまり、かっこよくなかった。
さみしい感じがする。

滝

鍋谷好美

ごうごうと、すごい音で、
天から水が流れおちる。
かけっぷちの青葉に、しぶきが光る。
滝は、わたしたちに何かさけんでいる。
滝は、大きな口をあけて何かさけんでいる。
滝は、こわい顔をして何かさけんでいる。
でも、わたしにはわからない。
この滝は、いつかなくなるだろう。
その時、滝の言っていることが
きっと、わかるだろう。

ランドセル

吉田智美

赤い皮のランドセル。
初めて歩いた、通学路。
ちょうと花にむかえられ、
ありがとう。と言ったっけ、
うれしかったランドセル。

赤い皮のランドセル。
雨や風にもまけないで、
いつも手をふり、足をあげ、
いっしょに泣いてくれたっけ、
ありがとうね、ランドセル。

赤い皮のランドセル。
小川の土手のふきのとう。
希望にみちた、まなびやに、
もうおわかれね。と言ったっけ。
さようなら、ランドセル。

かみなり

杉田秀博

ある夜、突然
かみなりが鳴った。
ピカッー、
まるで、金色の刀が地面をさすよう。

時には、何の罪もない家を、
あたり前のように、灰にする。
するどい刀のようなかみなり。
けい光燈のように、なまめに光るかみなり。

かみなりには、いろんな友人がいる。
黒雲、雨、風、
かみなりの友人は、みんなきらいだ。

雲

金森玲子

音もなく降る雪。
寒そうな木の枝に、
わたぼうしをプレゼントする雪
朝、戸をあけると、
一面の白一色
私も、雪のような
きれいな心になりたい。

朝日

鍋谷一富美

サッと、カーテンを開く。
まぶしい朝の光が、パット目をさす。
思わず目をつぶる。
なんと、気持ちのよい朝だろう。
雪の原を照らし、
雪の精が、私によびかける。

教室にはいると、
配ぜん台が、暖く光って、
「お早う。」と呼びかける。
私の心に希望をよみがえらせてくれる。

石

池原政信

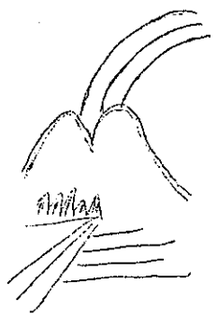
さまざまな石、
石には命がない。
けれど、考えている石、
すわっている石、
おこっている石、
やさしい石
みんな命がありそうだ。
だけど石は動けない。
夏も、冬も同じところにいて、
もえるような太陽にも、
こおりつく寒さにも
じっと、がまんしている。
自由に動ける人間はしあわせだ。

雪

長島道代

まっ白な雪。
きれいな雪。
音もなく降ってくる。
空を見上げれば、
はるか遠くからひらひら
まいおりてくる。
きらきらと白く　かがやきながら、
いつのまにか、私たちをつつんでしまう。
この地上をすっぽりと、
白いまくでつつんでしまう。
ひと晩の間に
地上を白銀の世界にかえてしまう。

中学校

田又雅二

新しい学校、
新しい先生、
新しい友だち、
新しいつくえ、
男は、みんなぼうずになる。
もうすぐ、中学生だ。
ぼくに、どんな友だちができるだろう。
ほがらかな、のんきな友だちが、
できるといいな。